

現象学の勧め

-- 立松現象学に学ぶ --

永田和弘 2006.10.2.

今、医療現場ではEBM (Evidence Based Medicine 立証されたことを基盤にした医学) が強く叫ばれる風潮があります。患者側としてはひらめきで治療されたのではたまりませんが、EBM の名の下に素朴な自然科学的態度で治療されても困ったものです。

現象学を学ばれた方には素朴な自然科学的態度が何を意味するかは分かっただけですが、一般の医師には「科学的態度のどこがいけないのか」と困惑するでしょう。

古代ギリシアのヒポクラテスは「何一つ見逃すな」と言いました。医療の現場において観察は非常に大事です。科学的医学・医療工学など医療の最先端も変化をしてきました。肉眼による観察は機器による分析に変化し、アナログな経験よりもデジタルな計量が支配しています。

観察する私は機械の前に消失し、診察される患者は過去・人格を剥ぎ取られて病人としてではなく病気を有した人体として横たわっています。

病気は自然からの逸脱と考えられますが、このような状況の中、現象学はどのように生かされるかは興味あるテーマと思います。

1. 医療的観察と現象学

ヒポクラテスの「何一つ見逃すな」は『ヒポクラテス全集』を調べていくと、単なる観察の励行を述べているのではないことに気づきます。「何一つ見逃すな」は何をどのように見ることなのでしょう。これを歯科治療の現場から見てみましょう。

1) 先ずは局所の観察です。口腔や歯牙の観察です。

2) 次に、見識ある歯科医は局所と全身との関連の観察に進みます。「見えるがまま」を逃さず見取ることから始まり、「咬合の狂い」からくる全身のひずみ（肩こりや腰痛など）を見逃してはいけません。肩こりなどは直接見れませんから、肩を触診しなければなりません。顎の位置が本来よりもわずかに左右に偏位することで偏位した側の足の裏に「魚の目」ができることがあります。顎の偏位が疑われるときは「魚の目」「水虫」を問いかけて確認する必要があります。観察は「見えるがまま」を観察するだけではダメで、そのままでは見えないところにまで「観察」の眼を向けなくてはなりません。

3) 更に、非 Visual な観察も必要です。これは Visual なものの観察以外に、怖がっているのではないとか、治療費を心配しているのではないかなどの非 Visual なものへの観察です。

4) 環境と疾患との関係。身体の局所に生じた病気ではあるが、自宅の状況や家族構成、又は地域の特性なども大きく関係する場合があります。

5) 既往歴。「病気は一日にして成らず」です。胃を悪くする人は胃が悪くなる状況の中を生きています。歯を悪くする人はそのような日常を生きてきました。

ここまで見てくると、局所の病気ですがそれを全身の変化が包み、その全身を環境が包み、その環境ごとその患者は時間の中を生きてきたこととなります。このような病気の実態を「何一つ見逃すな」というのは大変に難しいのです。

医療とは患者も医師もロボットではない誠に人間的な相互の営みです。ヒポクラテス医学の

根底を流れるものは、「2つとして同じ症例はない“特殊”に対応している」という姿勢です。特殊への対応は普遍への対応とは異なります。それは物体の落下という普遍的な現象と病気という特殊の症状とを対比させて考えればよく分かることです。以下の患者さんとの面接風景を見てみましょう。落下するリンゴには為し得ない質問です。

「どうされましたか」（来院の動機）

「口が開かず、頭が痛いのです」

「いつからですか」（初発時期）

「1週間ぐらい前からです」

「頭のどのへんがどのようにお痛みですか」（部位と種類）

「顔半分が頭にかけてドーンとした重い痛みです」

「きついですか」（程度）

「眠れないぐらいです」

「どのようなときにお痛みが増しますか」（傾向）

「食後とか寝るときです」

「お痛みは続きますか、それとも痛んだり、治ったりですか」（性質）

「続いています。ずっと寝ていません」

「頭のお痛みや、口が開かない以外に何か症状はありませんか」（他の症状）

「ありません」

「首の後ろや肩が凝ることはありませんか」（経験からくる誘導）

「パンパンに凝って気分が悪いぐらいです」

「めまいや手足のしびれ・お痛みはありませんか」（影響と関連症状の類推）

「昔からめまいというか船酔いのような感じがありますが、関係があるのですか」

更に問診は続くが、みてお判りの様に落下測定とは異なり、医療の現場ではどのような返事が返って来るかは予断を許さない。返事の内容だけではなく、患者さんの雰囲気からでも質問は要点を押さえながらも流動的に変化をして行く。

このような中で現象学はどのように生かされるであろうか。

現実の出来事のほうが「科学」や「哲学」よりもはるかに複雑怪奇です。上記の診察プロセスは「科学」や「哲学」の成果から組み立てられたものと言うよりは、現実の中から生み出された経験によるものです。これらのプロセスの全てを今日の科学や哲学が用意できるとは思いません。だから、「科学」や「哲学」はダメだというのではなく、現実の中からの要請で「科学」や「哲学」が構築されていくのです。全ての説明ができないとはいえ、「科学」や「哲学」から学ぶことは多々あります。現場から「科学」や「哲学」に何を要請するかが大事な今日になってきました。フッサールは現象学を完成して逝ったのではないと思います。未完成だから不完全なのではありません。我々後に行くものは、フッサールが築こうとして改修に改修を重ねたその姿を学ぶべきです。「何を見ているのか」「何を知りたいのか」「何が分かったのか」これらを常に根底から見なおしたフッサールの「スタイル」が問題なのです。

2. 学究スタイルについて

現象学は医療現場において極めて有用な方法論を提供してくれます。そのように思うことから、友人たちにも勧めてみましたがほとんどの人は興味を示しませんでした。還暦を越えてか

らは、勧めるエネルギーもなくなりましたが、一方で現象学に関心を寄せることには性格・素質も関係するものと思うようになりました。

人にはそれぞれ得意・不得意があります。「霞の中だが、そこに山があるよ」と問題提起をすることが優れている人、測量しマップを作成する人、道を拓いて登る人と様々です。EBMは拓かれた安全・確実な道を行くべしと言うことになるでしょう。多くの臨床家は患者のみならず自身の安全・確実・保身も考えてEBMを実践するということになります。普通であれば見えない霞のかかった山を見出すことや、完全と信じられてきたMapにひどい過ちがあることを発見できるのは現象学的考察がとても役に立ちます。

現在の優等生は知識・技術を「より多く、より正確に、より早く」が求められます。しかし、ここには「先行する人も書物もない世界に如何に分け入るか」は見出せません。EBMの立脚基盤も最初は「先行する人も書物もない状態だった」から始まったはずです。確立されたEvidenceといえどもそれを最初に見出した人は自分の観察を基盤として問題提起をしたのでした。どのようにしてそこに「山」があることに気付いたか、どのように測量されたかを知ることが、後から道を行く人にも本当は重要なことです。

ここに現象学的考察の有用性があります。

3. 現象学の混乱

現象学は非常に有効な方法論を提出してくれるのですが、如何せんその難解さは忍耐を要求します。余りの難解さのためにいくつかの「現象学とは何か」「現象学入門」の類の解説本を求めるようになります。フッサールは分からないが、取り付きやすい本にめぐり合えたとしましょう。「分かった気持ちになる」。しかし、フッサール現象学は幾多の人により解釈され、その各々により微妙に軸はぶれています。著名な哲学者の「現象学理解」の最大公約数が「現象学」なののでしょうか？ EBMならぬEvidence Based Phenomenologyというところでしょうか。しかし、このスタイルはフッサールが一番批判したスタイルではありませんか？

現象学的に現象学を理解するためにはどうすればよいのでしょうか。「事象そのものへ」ならぬ「原点そのものへ」でありましょう。解説本が悪いと言うものではありません。厳密にはそれらは間違っていると思いますが、デカルトやカントの哲学とは現象学は世界が異なるために、覚悟とか雰囲気とかを確認するためには解説本はそれなりの役割を果たしてくれると思います。しかし、いざ、フッサールに入るとそれら解説本は何の役にも立たないことが分かってきます。また、フッサールは講義中に思索のため講義を中断することもあったと聞きます。「原点・原典に戻れ」と言いますが、原点であるフッサール自身が戸惑い、苦しんで歩いているわけです。『論理学研究』(1901)から『現象学の理念』(1907)を経て『イデー』(1913)に至るまでの変化は、どこをもって「フッサールの現象学」と言えるのかを曖昧にします。

変化はあるが、ぶれない軸としての「素朴な自然的態度への疑問」と「如何にそれに気付くか」はフッサールその人に確認をしておく必要があるでしょう。他の哲学者はともかく、フッサールはどう考えたか、どう言っているかがBaseとならねばなりません。

外国の研究者はアイデンティティを求められるために、思い切った解釈や発展させた解釈ないし哲学分野を示そうとします。これらのことは初心者にはかえってありがた迷惑で、むしろフッサールの理解を歪曲しかねません。といて、西洋の哲学者にフッサール学者たれというのも酷なことでしょう。

フッサール理解のために軸をどこにおくかは重要なポイントでしょう。フッサールの変化する原点の中で軸を見据え、その軸を基準にフッサール原点そのものの遠近を見る。このことにより、他の学者がフッサールをどのように解釈したかの基盤が得られる。現象学を取り巻く他の哲学の潮流との相対もはっきりとしてくる。

4. 現象学と歴史学

現象学において「直観」は重要な概念ですが、直観できない歴史的事象についてはどうでしょうか。このように対象が過去の事象の場合については直観的な対応ができないとして「現象学は歴史考察にはなじまない」という考え方が持たれていました。立松先生の論考の中にフッサールは歴史的な考察もしており、現象学的方法論は歴史分野においても対応することが記述されているのは大変にうれしく思いました。私は歯科医学史を研究しているものですから、日常の歯科臨床と同じく歴史考察の場合も我流で現象学的に歴史考察をしてきました。「重要なのは歴史的事実であって、歴史解釈は勝手である」と「事実が事実となるためには人の解釈を通過させねばならない」との輪廻の中から歴史は構築されていく。我流と思っていた現象学的歴史考察がフッサールも歴史に参入していたとなれば、私の我流もとんでもない間違いではないことになるし、フッサールの下で更に歴史観に正確さを得る楽しみができることになる。「現象学は歴史学にも良く似合う」はうれしい論考でした。

以上が『フッサールと現象学運動』（講座 近・現代ドイツ哲学 II --- ヘーゲル以後フッサールまで ---、所収 理想社刊 2006, 東京）の随想です。

5. 立松現象学の成立

立松先生の現象学は先生の人格・過去と深く関わっていると思います。日本という文化の中で、先生の「生死」「認識」「存在」が奇跡的に絡んで特有の「立松フッサール解釈」を成立させたと思います。フッサール学を基盤として種々の現象学を概観するとき、初めて現象学者達が何に関心を寄せたかが分かってきます。これは何が有用で何が有用でないかにつながる考察です。ハイデッガーはフッサールを精読したとのことですが、精読したけれども理解はできていないのではないのでしょうか。ハイデッガーの実存哲学はむしろ存在論の論理学であって、軸ぶれが無い分だけ論争には強いでしょうが、彼の哲学からは得るところは極めて少ないでしょう。メルロ・ポンティの観察力には眼を見張るものがありますが、実践的現象学という感じで視座の強化にはフッサールの基軸は不可欠と思います。

フッサールは多くの人たちの関心の中、理解を得ることなく孤独な中で逝ったようです。しかし、彼が確信した方法論は種々の分野でこれからも成果を挙げていくでしょう。目標に軸ぶれは無いけれども、種々の考察には工夫と戸惑いが散見されます。フッサールの後に行くものは、やはりまた試行錯誤で（しかし、目標は軸ブレ無しで）行くしかないでしょう。フッサールにもう一度の人生を与えたならばどのように自己展開したのでしょうか。立松現象学を読むとそのあたりが見えてきそうです。

先生の厳密な論考の姿勢には学問する姿勢を教えてくださいました。ありがとうございました。